

矢島道子著「地質学者ナウマン伝—フォッサマグナに挑んだお雇い外国人—」

朝日新聞出版, 320p, 2019年10月25日発行
1,700円(税別), ISBN978-4-02-263090-2

矢島さんと地学教育の会議の席で初めて顔を合わせたのは、かれこれ20年以上前になる。出会った当時、彼女は私立高校の教員をなさっていたが、学究肌で本質をズバッと直球で指摘なさる姿は、若輩者の僕としては、背筋を伸ばして話を聞かねばと思わせる、畏れ多い存在であった。

それ以来、何故か馬が合い、幸運にも雷を落とされずに、地学教育の委員会活動でずっと一緒させていただいている。コーヒーとチョコ(矢島さんの大好物)で話が弾み、或いはグラスを片手に議論もしたが、不思議とナウマンに関する話題は一度も伺ったことはなかった。この20数年間、矢島さんはずっとナウマンのことを密かに(僕にはそう思える)追いかけてきたが、その集大成がいよいよ本書として結実した。満を持しての上梓と言うべきであろう。巻末の膨大な文献リストが、この間の入念な調査を裏付ける。

さてそのナウマンだが、読者は彼について何を知っているだろうか。この雑誌の読者なら、ナウマン象の名前の由来になっていることは自明だろうが、それ以外の特筆すべき業績を、多くの読者はあまり知らないのではあるまいか。

非常に重要な業績を残しておきながら、現在では象の名称のみにナウマンの名前が収まっているというのは、甚だ不公平ではないか。そればかりか、近代日本の黎明期に功績のあったお雇い外国人の中で、これほど悪評の立っている者はいないと矢島さんは嘆く。噂を鵜呑みにするのではなく、評価するべきものは正しく取り上げるべきだという矢島さんの真っ直ぐな姿勢が、本書を書き上げる原動力となっている。

それに加え、ナウマンが東大地質学教室の初代教授であるにもかかわらず、肖像画も銅像もないばかりか、名を口にするのも憚られる雰囲気の母校地質学教室への批判も、密かなモチベーションだったのではあるまいか。地質学教室に枯れない地下水脈としてかつて(今も?)存在したナウマンへの盲目的で邪な評価への

反証として、静かに本書を示したかったに違いない。

さあ、本書の内容に移ろう。冒頭、まず読者は柔らかな違和感に包まれる。そこには、天国のナウマンに向けて、あなたと呼びかける手紙が掲げられている。日本人があなたのことでまた騒いでいるという件は、「これまでは噂レベルの情報に基づく論争が続いてきましたが、今度は違いますよ、見ててください」という母校の遠い恩師への尊敬、踏み込んで言えば慕慕の念が示されているように思える。

さてナウマンの功績とは何か。本書では、ナウマンの足跡が年代別に詳細に述べられているが、ここでは特筆すべき2つの仕事について紹介しよう。

1つ目は、来日してたった3ヶ月で出かけた初めての巡検で、長野県野辺山高原の平沢から見た光景—鳥弧を完全に横断して走る溝のような土地に多数の火山を生み出している—に対してフォッサマグナと命名したことである(第2章「フォッサマグナとの出会い1875-76」)。

2つ目は、地質調査所の発足に関わり、自らは地質技師長として、寸暇を惜しんで日本各地での地質調査の陣頭に立ち、フォッサマグナと中央構造線の存在を見抜いた、現在でも十分通用する精巧な全日本地質図(北海道は除く)の作成である(第7章「地質調査、そして地質調査(1882-84)」, 第8章「日本地質図の完成へ(1885-84)」)。

最後に、ナウマンへの悪評の基になった事件を挙げておく。一つは、妻の不倫が発覚したことによる決闘騒ぎ(第6章「結婚、決闘、離婚(1880-82)」)であり、もう一つは、日本の風俗習慣を巡る森鷗外との論争(第9章「帰独、凱旋講演、森鷗外との論争(1885-88)」)である。特に後者の論争での行き違いが、ナウマンを決定的に悪役に位置づけた。

これ以外にも、本書にはナウマンの人間味が匂う多数のエピソードが示されている。全日本地質図を完成させた超人を身近に感じていただけたら幸いである。

(埼玉県立熊谷高等学校 宮嶋 敏)

2019.12.1 受付

2020.3.26 学会ニュースレター公開

2020.6.9 学会ホームページ公開